

発達期待に関する研究

詫 摩 武 俊 (東京都立大学心理学研究室)

親は子どもに対して、このように育てて欲しいという希望を抱く。この希望は明確に意識されることもあるが、十分に自覚されないこともある。この希望のことを発達期待といい、日常のしつけはこれに沿ってなされる。

しつけにおける正の目標を「良い子」像といい、負の目標を「悪い子」像という。

研究目的

「良い子」像、「悪い子」像が、子ども側の要因(性別、出生順位、年齢)、母親側の要因(学歴、パーソナリティ、夫との関係、職業の有無、etc.)、父親側の要因(学歴、パーソナリティ、妻との関係、職業 etc.)によってどう違ってくるかを明らかにする。可能な限り地域差(大都市、中小都市、町村など)も検討したい。

方 法

因子分析、あるいは数量化Ⅲ類により、「良い子」像、「悪い子」像を構成する次元を抽出し、上にあげた要因のちがいにより、その次元上を「良い子」像、「悪い子」像がどのように移動するかを検討する。

この研究の特徴

従来の研究と次の点で違っている。

1. 「悪い子」像を含めている。
2. 多変量解析により、「良い子」像、「悪い子」像を構造的に分析する。
3. 実際の母-子関係をサンプルにとり、社会的ステレオタイプの影響を研究する。

第1年度は「良い子」、「悪い子」の基礎的資料を収集し、第2年度、第3年度に本格的研究に入る。

昭和58年度研究報告

本年度に行った研究の一部を報告する。

内容は発達期待に関する問題である。調査対象は小・中学校の校長 226 名、小学校児童をもつ母親 199 名で、小学校1年生くらいの子どもがいた場合、その子がどんな子どもであることを望むかと尋ね、表1の15項目の中から、男の子の場合と女の子の場合にわけて、それぞれ5項目ずつ選択するように求めた。表の中の数字はそれぞれの項目を選んだ者の比率である。なお男の子の場合と女の子の場合とで同じ項目を選んでも差支えないこととした。

表1. 男の子、女の子に対する発達期待(1983)

	校長 N=226		母親 N=199	
	男の子	女の子	男の子	女の子
	1. 物事を慎重によく考える子供	12.8	20.9	16.1
2. 粘り強い子供	50.4	16.9	59.3	29.8
3. 他人への思いやりの深い子供	54.0	91.6	56.3	88.9
4. 言われたことを素直によくきく子供	20.8	40.0	7.5	20.2
5. しっかりと自己主張のできる子供	31.0	10.7	72.9	40.4
6. 知的関心の強い子供	33.2	15.1	11.1	13.1
7. ものごとに対して積極的な子供	41.2	15.6	51.3	27.2
8. 気持ちのおだやかな子供	22.6	75.1	8.5	47.5
9. 友だちに人気のある子供	6.2	8.9	16.6	24.2
10. 勉強が好きでよくできる子供	1.8	0	3.0	2.5
11. ユーモアのある子供	25.7	13.8	20.1	14.1
12. 明るい子供	55.8	77.3	30.7	57.1
13. 誠実でうそをつかない子供	44.7	49.8	36.2	36.4
14. 責任感の強い子供	40.7	30.7	48.7	27.3
15. 活発で元気な子供	48.7	28.0	58.8	36.4

結 果

- 40%以上のものが望ましいとしている事項は、校長の場合、男子に7項目、女子に5項目、母親の場合、男子に6項目、女子に4項目ある。いずれも男子に多い。女子には、たとえば他人への思いやりが深いことなど、90%前後が望ましいとしている項目があるが、男子にはない。男子に対する期待像には個人差が大きいのに対し、女子に対するそれはどちらかといえば固定的であるといえる。
- 男の子に対する期待と女の子に対する期待はかなり相違している。校長も母親も男の子に対しては女の子に対するときよりも粘り強く、しっかりと自己主張ができ、ものごとに対して積

極的で、責任感が強く、活発で元気のよいことを望み、女の子に対しては男の子に対するときよりも、他人への思いやりが深く、素直で、気持ちがおだやかで明るい子どもであることを望んでいる。

- 校長と母親を比較すると、母親のほうが男の子も女の子も粘り強く、しっかりと自己主張ができ、ものごとに対して積極的で友だちに人気のあることを望んでいるが、校長は素直で、気持ちがおだやかで、明るい子どもであることを望んでいる。

これらの資料の詳細な分析、さらに掘り下げた研究、望ましくない子どもの問題は今後の課題である。